

## 要旨

1986年男女雇用機会均等法の実施以降、日本の女性の経済的・社会的な状況は急激に変化した。女性の労働条件が改善されることによって女性の労働人口が増加し、女性の職域は広がった。時代の変化とともに、「働く女性」の姿も無視できないようになってきた。そして、職業生活が保障される上で、女性の社会進出が増え、女性の生き方、あるいはライフコースも多様化してきた。時代の変化に伴い、メディアにおける「働く女性」についての表象も変わっていると考えられる。

本研究においては、特に女性向けのマンガに注目し、社会背景を踏まえながら、マンガにおける「仕事」および「ライフコース」の表現の変化を明らかにする。なぜ女性マンガを取り上げるかという点、女性向けのマンガは70年代から現在まで、女性作家が圧倒的に多く、受け手も主に女性読者であるからである。テレビや新聞などのような男性に主導されるメディアに比べ、女性向けのマンガは「女性の視点」を重視するメディアであり、女性の意識をかなり直接に反映している、あるいは変化についていけなければ淘汰されるメディアだと考えられる。

女性向けのマンガの中の「働く女性」の表象について取り上げた先行研究には、藤本由香里『私の居場所はどこにあるの—少女マンガが映す心のかたち』と、トミヤマユキコの博士論文「現代少女マンガにおける女性労働表象の研究」がある。どちらの研究も、均等法以降、女性マンガにおける仕事の描写が確実に変化したと指摘している。しかし、藤本の研究は2000年までの作品しか扱っておらず、トミヤマの論文は個々の作品についての分析をメインに、2010年までの作品しか論じていないため、80年代の初めに大人の女性向けのレディースコミックが創刊されてから現在に至るまでの女性マンガが、総体としてどう変化してきたのか、その変化はそのときどきの時代背景とどう結びついていたのか、などについてはまだ明らかにされていないといえる。

そこで本研究においては、80年代から現在までの複数の女性マンガ誌を、「女性の仕事」および「ライフコースの選択」などの描写に注目し、時代背景を意識しながら網羅的に見ることで、その表現が実際にはどのように変化していったのかを明らかにする。

具体的にはまず、80年代初めに創刊され、想定される読者層の平均年齢もより高く、働く女性を描いた作品も多いレディースコミックである『BE・LOVE』（講談社）、『YOU』（集英社）、『FORLADY』（小学館）を創刊号から現在まで、あるいは休刊号まで調査してデータをとる。この3誌を取り上げる理由は、これらがそれぞれ講談社・集英社・小学館の三大マンガ出版社から刊行されたレディース誌であり、いずれも80年代初頭に創刊されているため、1986年に施行された男女雇用均等法前後の評価を観察できるからである。

つづいて、いずれも90年代の初めに創刊され、レディースコミックよりは読者層が若いと考えられるヤングレディース誌の『KISS』（講談社）、『コーラス』・『ココハナ』（集英社、

誌名変更の継続誌)を調査対象として取り上げる。

最後に、対象項として、主婦向けのレディースコミック『エレガンス・イブ』(秋田書店)も調査対象として取り上げる。

これらの雑誌を、統計シートに基づいて、5年ごとにバックナンバーを調査し、結果を分析する。統計シートで調査するのは、①主人公の年齢、②主人公のライフコース、③作品のテーマ、④仕事の内容、⑤仕事の具体描写、⑥主人公の悩み・関心、最後に⑦夫・恋人の家事協力、である。

まず、第一章においては、80年代から現在まで、レディースコミック『BE・LOVE』、『YOU』、『FOR LADY』における「仕事」および「ライフコース」の変化を分析した。また、均等法直後、女性向けのマンガは変化していたのか、各誌はこの潮流にどう対応していたのかを観察し、3誌の表現を比較した。結果は、『BE・LOVE』において、均等法以降、仕事の要素が非常に重視されていた。均等法施行の直後から、『BE・LOVE』の反応は、3誌の中で最も素早かった。『YOU』は『BE・LOVE』より10年遅く、2000年以降、作品のテーマを仕事へとシフトし、2000~2010年においては、「仕事」の要素が非常に多く盛り込まれていた。しかし2010年以降はファンタジー路線を強め、『YOU』は2019年に休刊した。一方、創刊から10年もたず、1990年に休刊した『FOR LADY』では、仕事マンガもあるが、「主婦」主人公の割合の多さは3誌の中で圧倒的で、均等法以降、世の中の動きに逆行するように主婦が増え、テーマも、「家族の問題」へとシフトしていた。

第二章においては、主にヤングレディースの『KISS』と『コーラス』・『ココハナ』における「仕事」と「ライフコース」を分析した。結果としては、ヤングレディースにおいては「恋愛」が主流であるが、やはりしだいに「仕事」についての描写も盛り込まれるようになっていた。また、レディースコミックに比べると、ヤングレディースにける主人公の年齢はより若く、既婚率もより低かった。比較すると、ヤングレディースでは仕事の要素はレディースコミックより少ないが、「仕事に対する関心」が主人公の設定としてかなり重要になっている。とくに、独身で「恋人がいない」主人公が多いにもかかわらず、悩みや関心をみると、彼女たちは「恋人がいない・結婚できない」よりも「仕事」上の悩みや関心の方が圧倒的に強いことがわかった。

第三章は主婦向けの『エレガンス・イブ』の分析である。『エレガンス・イブ』は、最初は『BE・LOVE』や『YOU』と同じスタンスのレディースコミック誌であったが、だんだん主婦向けの漫画雑誌へと路線を変更していった。調査の結果、『エレガンス・イブ』の主人公の年齢構成とライフコースを見ると、年齢層が他誌よりより高く、パートナーがいたり、既婚の主人公が多いことが分かった。また、主婦向けの『エレガンス・イブ』においても、仕事の要素がかなり強調されており、『40歳のハローワーク 主婦の私にできる仕事って?』のような「主婦と仕事」がテーマの作品も登場し、長期連載になっていることが注目される。

第五章は、主人公の夫・恋人の家事分担についての描写分析である。現在は女性の社会進

出とともに夫の家事・育児参加の意識が高まっており、共働きが多くなればパートナーのあり方も変わっているだろう。このような社会背景を踏まえ、女性向けのマンガにおける「仕事」および「ライフコース」の描き方を観察したところ、その描写は確実に変化していたことが分かった。レディースコミック『BE・LOVE』と『YOU』においては、主に既婚の主人公と夫との家事分担の描写があり、ヤングレディースにおいては、同棲中の恋人との家事分担描写のほうが多かった。また、調査したバックナンバーにおいて、80年代には家事分担の描写はほぼ「不明」であったが、90年代に入ると、男性の家事分担の描写がしだいに増えており、とくに『KISS』においては、男性の家事分担の描写が多い作品は例外なく人気作品であり、家事が得意な夫・恋人というのは、女性向けのマンガにおいて、今ではかなりの人気設定になっていると考えられる。

全体を見れば、80年代から現在まで、女性向けのマンガは常に進化していた。時代遅れで休刊になった雑誌もあるが、現存の雑誌は時代に敏感に反応し、主人公の生き方が多様化してきている傾向がはっきり見えた。「仕事」と「恋愛」の位置づけや、主人公にとっての重要度は変化していたが、女性向けのマンガにおいてはどちらも重要な要素である。とはいえ、もはや女性向けのマンガは、完全な恋愛もの主導ではなくなり、「仕事」が重要な要素になってきていると結論づけることができる。